

子どもたちといっしょに

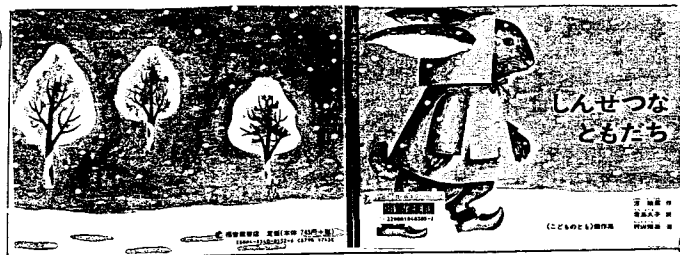
「しんせつなともだち」

《こどものとも》傑作集

方 執筆作

君島久子 訳

村山知義 画



ゆきがたくさんふって、のもやまもすっかりまっしろになりました。こうさがたべものをさがしにいくと、かぶがふたつありました。こうさは、ひとつだけたべて、ひとつをろばにもっていきますが、ろばはるすでした。こうさは、かぶをろとおいてきます。ろばからこやぎへ、こやぎからこじかへ、こじかからうさぎへ、というように、かぶはめぐって、もとのうさぎのところへもどります。

友達というもの、親切ということ、これ程、わかり易く描いた本は、めったに、お目にかけられるものではありません。絵も、しっかりとしていて、学校などでも読みがたりできます。あたたかいぬくもりを感じ、優しさに心がなごみます。

ご家族で、おたのしみ下さい。

第39回読書会



「のっぴのサラ」(徳間書店)

パトリシア・マクラクラン作

金原瑞人訳 中村彬子絵

1月18日(日) 1:30~3:30

於: 学習館ルー42

大草原にくらす家族を描いたやさしい優の物語

(しろね図書館 しろね図書館友の会 共催)

読書会へ、かたくて学術的なものか、なつて、読書量が、増え、心の糧、になつて、自分の考え、と違つて、意見を交すのも楽しい、し、人に本のす、められて嬉しい、

読書会へ、かたくて学術的なものか、なつて、読書量が、増え、心の糧、になつて、自分の考え、と違つて、意見を交すのも楽しい、し、人に本のす、められて嬉しい、

読書会へ、かたくて学術的なものか、なつて、読書量が、増え、心の糧、になつて、自分の考え、と違つて、意見を交すのも楽しい、し、人に本のす、められて嬉しい、

1月の行事

6 (火)	開館初め
7 (水)	絵本のじかん 3:00~
10 (土)	おはなし会 3:00~
14 (水)	絵本のじかん 3:00~
17 (土)	おはなし会 3:00~
18 (日)	第39回読書会 1:30
21 (水)	絵本のじかん 3:00~
24 (土)	おはなし会 3:00~
28 (水)	絵本のじかん 3:00~

不況の時こそ図書館を利用して!

エネルギーを貯えましょう!

図書館では、赤ちゃんからおとしよりまで、幅広いジャンルの本を揃えて、お待ちしております。小さい頃から良い本を読み、新しく広い世界を知ること、人として豊かで大きなものを、得るよすがとなります。年を重ねれば、それだけ良い本に出合えた喜びは大きくなり、生きてゆく道の「いやしの泉」となることでしょう。充足した生活のために本をお読み下さい!

しろね図書館だより

No. 44

発行 白根市立図書館

平成 16 年 1 月 1 日

しろね

新年おめでとうございます。

図書館の南側の広場の高いところに「慈」というブロンズ像が立ちました。白根出身の彫刻家 千野茂さんの作品で、千野雪子さん(夫人)が寄贈して下さった石膏像を、白根ロータリークラブが、ブロンズ化して台座も美しいものが立てて下さいました。ありがとうございました。

「慈」は、「いつくしむこと・めくみがかいこと・愛すること」の意があり、学習館に相応しい象徴(シンボル)となりました。時には、ゆっくり鑑賞して、心の安らぎを得て下さい。

今年こそ、世界中の子どもたちに平和と安らぎが、訪れますように。



1987「慈」

12月の

来館者-----12042 (観察7 観察80)

貸出冊数-----14,262 冊

予約件数-----173 件

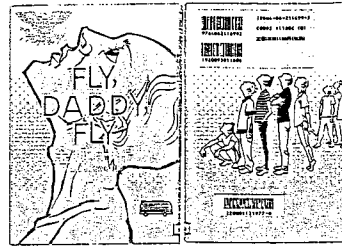
ブックバスは、12月・1月・2月は雪の降る季節のため、お休みします

リクエスト情報 (しばらくお待ち下さい)

- 1位・千と千尋の神隠し (9名)
- 2位・バカの壁 (7名)
- 3位・誰か (7名)
- 4位・世界の中心で、愛をさけぶ (4名)
- 5位・美しき日々 (3名) etc.

申し、今年は申しですが、サルの出てくる本を思いうかべると、何といっても日本では「かにむかし」「猿蓑」「ふるやのもり」などでしょう。そして、現代ものはアメリカのH.A.レイの「なとまねごさろ」に始まるおさるのじょーじシリーズは、世界中の子どもたちに愛されています。おもしろいのは「おさる日記」、読んでみてください。グリーンウ物語Ⅲ「グリーンウのお客さま」は圧巻です。

『FLY, DADDY, FLY』 金城一紀作 講談社 <一般 913.6カ>



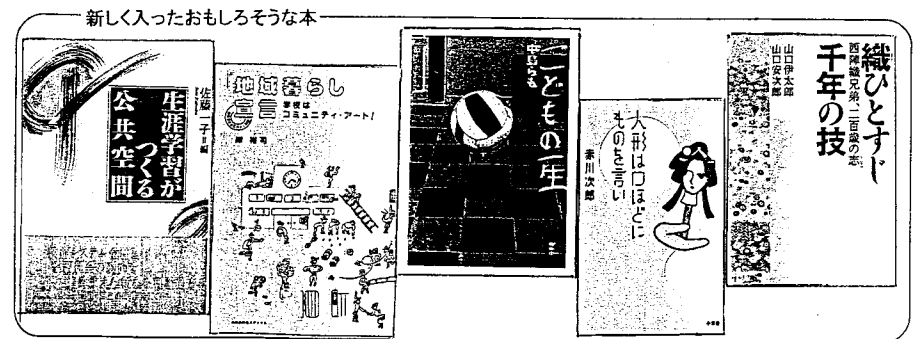
自分はまだ父親になったことがない。夫にすらまだ…。ある日こんな本を見つけた。「フライ、ダディ、フライ」直訳すると「飛べ、とうちゃん、飛べ」（訳す必要はないと思うが…）。以前、同著者の直木賞受賞作「GO」を呼んだことがあるが、そのとき、ものすごく感銘を受けた。世界がものすごく広く感じ、いま自分がいるここは世界の中のほんの一点にすぎないのだと。もっと広い世界を見てみたいと主人公のクルパーが言っていたがまさにそのとおり！だと思った。少し道を外れたが、それ以来この著者にはまってしまった。

まず、装丁から惹かれる。主人公であろう父親が空を見上げている横顔、それになぜか路線バスと鷹が端っこに描かれている。裏表紙に回ってみると今度はたくさんの人が空を見上げている。読む前から何となく何かが起こりそうな予感。物語はこうだ。平凡な、どこにでもいるようなサラリーマン鈴木一、家族をこよなく愛する47歳が約2ヶ月間のトレーニングを経てボクシングのインターハイチャンピオンに挑戦する。なぜ挑戦することになったのか？それは、7月9日、仕事が終わって家に帰ってみるといつも点いているはずの娘の部屋の明かりがない、おまけに家には妻もいない。その代わりテーブルの上に一通の手紙が…。<病院へいきます>と書かれており、不安を抱えながら病院へと急いだ。そこには、片方の目は腫れ上がりほとんど塞がった状態でベッドに横たわっている娘がいた。娘の変わり果てた姿に鈴木一は動転してしまい、娘に差し出された手も握れなかった。犯人は高校生の石原（父は俳優、母は女優、設定からして嫌味な奴だ）、ボクシングインターハイチャンピオン。刃物をもって仕返しをしに行くが学校を間違っしてしまい、偶然その高校にいた南方、板良敷、萱野、山下、朴舜臣に「石原を出せ！」と啖呵をきるが日射病であっけなく撃沈。気がついてみるといつの間にか南方たちに乗せられて素手で石原と戦うはめになってしまう。しかも大舞台?!で。そして、お膳立てをする代わりにちゃっかり交換条件も。そんなこんなで、次の日から石原を倒す為のトレーニングが開始された。先生は喧嘩の達人、朴舜臣。娘を救う力を手に入れるために有給休暇をいっぱい使って会社も休んだ。食事制限もした。体が毎日作り変わっていく。自信もついてくる。そしていよいよ決戦の舞台へ！

さて、鈴木一は石原を倒し失意の娘を救うことができるのだろうか？かっこいい生き様にこんな人生でもいいじゃないか！と思わせる、読んだあと清々しい気分になる作品です。

表紙の路線バスと鷹もどうして描かれているのか？すべては読んでみてのお楽しみです！

【司書 小林友治】



第三十八回 読書会

十二月十四日(日)午後一時半より

参加者九名

『それぞれの世界へ』

マリア・グリーベ作

この本は三部作で、先々月の「エレベーターで4階へ」、先月の「自分の部屋があったら」に続く最終巻です。これまでの内容は図書館だよりに載せてあるので、ここでは、第三巻についてお話しします。

物語はイースターの少し前から始まります。十二歳になったロツテンは、近頃母親のエルサが何を考えているのかわからなくなってしまう。母は今までのような母と娘、二人の生活に他人を介入させようとしている。もちろんロツテンはのけものにされているような感じで、その結婚には反対している。そんなある日、川で泳いで戻ると、くつが片一方なくなっていた。あちこち探してから元のところに戻ってくると、なくしたはずのくつがおいてあった。そして、中には銀のネックレスが入っており、そのネックレスは意味は…。

それからしばらくして屋敷が火事になるという事件が起こり、それをきっかけに登場人物た

ちの秘密が次々と明かされていきます。そして、それぞれがそれぞれの道へ進んでいくようになります。最後にはいよいよロツテンも自分の部屋が持てるようになりますが、結局のところロツテンの父親が誰なのか語られずじまい。謎が残ったまま物語は閉じられます。

* 読書会参加者の感想 *

(載せきれないので一部です)

「一巻、二巻と違い展開がいろいろあって読みやすくなった。ロツテンは十二歳の子どものなりに自分の考えとかがしっかりしていて妙におとなに感じられた。読む前はこの本の厚さに圧倒されてしまったが読んでみると昔の習慣や風習が垣間見られて、行ったことのない、知らない文化だけれども自分がそこにいるような感覚になった。」

「私も厚さにあつとつされた、でも読んでみると楽しくてしかたがなかったし、読後感はずかしくなってきた。母親がロツテンの考えをちゃんと尊重してくれて、考えてくれているので、そこは日本と違うんだなと思った。」

「みなさんと違って私は読みにくかった。ロツテンの気持ちやいろいろな事件があつて読んでいたときの気持ちがズシンと重くなった…。ネックレスのこととかビルが本場にロツテンの父親なのかいりいろなことがあつて、全体的に謎めいていて。」

「一気に三巻読んだ、これが一番面白かった。ロツテンの謎解きをしながらか読み進めたがジプシーというのが一つの鍵なのでは？と思った。」

「ロツテンはオルガの娘？ビルはロツテンの本当の父親？語られない秘密がいっぱいあつて想像が膨らんだ。オルガが自転車で馬と競争しているところがすごく面白かった。」

「以外な展開で自立していくので読み応えはあった。マリオンは自分で進むべき道を見つけたおとなに成長したが、ロツテンはたしてそういう意味ではおとなになったのだろうか？」

「この本は自分で想像しながら読み進めていくのが楽しい。一巻目のときにオルガがロツテンの本当の母親なんじゃないかと思つたが真相は語られなかった。」

次回読書会は…

二〇〇四年一月十八日(日)

『のっぽのサッポ』

パトリシア マクラクラン作 講談社

どうぞご参加ください

【小林友治】